

【研究ノート】

# 地方都市に「あるモノ」の社会資源化と ネットワーク構築の試み

岡 田 直 人  
栗 山 隆  
石 川 悟  
片 岡 徹

## 研究ノート

## 地方都市に「あるモノ」の社会資源化とネットワーク構築の試み

岡田直人 栗山 隆  
Naoto OKADA Takashi KURIYAMA

石川 悟 片岡 徹  
Satoru ISHIKAWA Toru KATAOKA

## 目次

- I. はじめに
  - II. 研究背景
  - III. 研究方法
  - IV. 研究結果
    - 1. 価値が創出される“場”
    - 2. 「あるモノ」の発掘
    - 3. 余市町のワイン用葡萄とリタファーム&ワイナリー, 10R ワイナリー
    - 4. 「あるモノ」の社会資源化のための価値の創出と伝搬手法
    - 5. 教育からの視点で考える
  - V. おわりに
- 注  
引用文献  
参考文献

## [Abstract]

**Research on Networking through the Process of Rediscovering Social Resources in Regional Towns and Cities**

This paper reevaluates social resources in regional towns and cities in Hokkaido Prefecture in order to rediscover their attractiveness, and tries to foster the so-called Copernican Conversion by adding further value to “something extant” which is not recognized as valuable by the inhabitants. This research was conducted by four researchers using an interdisciplinary approach including social work, community studies, psychology, and pedagogy. Using the results of field surveys combined with theoretical implications, the researchers found several conditions favorable to promoting such networking and areas requiring further research.

## I. はじめに

本研究は北海道内の地方都市をフィールドとして、以前からその土地に「あるモノ」（ここでは、自然、山の幸、海の幸、地域住民、職人、専門職、学校、寮、施設、役場、交通網、商店街、地場産業など）がもつ価値を再評価して、それらを有益に活用できる資源として取り上げ、人が面白がって集まり、地産地消のみならず圏外からの集客を見込めお金を落とす仕掛けづくりとそれら地域の社会資源のネットワーク化を模索し、その方法・

効果・課題について明らかにすることを研究目的としている。

## II. 研究背景

全国の地方都市では、さまざまな機能の都市部への一極集中により、過疎化と地場産業の衰退、公共交通をはじめとする地域のライフラインや買物や通院・通学できる場所が消滅し、若年人口のみならず老年人口も減少の一途をたどっている。そのようななか、昔からその地域にある資源を再評価し、藻谷ら

キーワード：地方都市，社会資源，ネットワーク構築

Key words：Regional Towns, Social Resources, Networking

(2013)のいう里山資本主義に代表されるように、地方都市の衰退にブレーキをかけ、可能ならばその地域に働ける場所を作り、若者を中心としてその地域で暮らしていけるようにしようとする取り組みが全国各地で試みられている。

一方、北海道では全国に先駆けて、過疎化と地域都市の衰退が進行してきてきた。そのようななか北海道でも、その土地でとれる自然の幸を地元ブランドとして付加価値をつけ、首都圏や世界を相手に商売を成功させるべく努力が重ねられている。しかし、そのような取り組みもその地域の一事業者や一業界の範囲に留まっており、その地域全体の社会資源の活用やそれらのネットワーク化による取り組みとはなっていない。

本研究の主なフィールドとなる後志管内および余市町は、道内でも温暖な気候で、豊富な海の幸のみならず、果樹等の生産が早くから始められ、道内ではいち早く果樹の生産地として成功し、全国的にも注目を集めている地域である。また、近年では、ワイン用葡萄の生産地、ワイン醸造でも評価が高まっている。加えて、世界で評価が高いニッカウキスキーの生産地として、2014年NHKドラマ「マッサン」の舞台として、余市が全国のみならず世界中で知られるようになった。このように知名度と恵まれた生産物をもつ余市の「あるモノ」を再評価し、上手く活かし切れていなかった以前から「あるモノ」を社会資源化し、それを取り巻く人や施設・機関等、これまでバラバラにしか活動できていなかった社会資源を互いに結びつける役割を研究者が担うことで、ネットワーク構築を図ることは、道内での取り組みとしては希有である。

今回は、数多くの恵まれた条件のもとで行う試みであるが、その成功に向けての手法および仕掛けの開発や明らかとなった課題は、今後の道内の他地域の同様の取り組みに有益な示唆を与えられるものと考えている。

### Ⅲ. 研究方法

本研究では、2014年5月から2015年3月の間、4人の研究者が余市町を中心として地方都市へのアウトリーチを繰り返した。各研究者は担当する研究課題について、ヒアリング・参与観察・資料収集等に取り組んだ。

役割分担は、岡田は本研究の全体を統括・調整を行った。また、コミュニティソーシャルワークの手法を応用して、「あるモノ」の社会資源化とネットワーク構築について本研究の骨組みになる部分の手法・仕掛けに関わった。また、実施したグループワークでは、ファシリテーターとしての役割を担った。栗山は本研究の全体を統括・調整する岡田のサポートを行った。あわせて、「あるモノ」の社会資源化とネットワーク構築について本研究の骨組みになる部分の手法・仕掛けに関わった。また、「あるモノ」のうち、地域住民、専門職（ソーシャルワーカーやスクールソーシャルワーカー等）、学校、施設、などがもつ福祉教育的価値を再評価して、それらを有益に活用できる資源を整備・開発・調整するためには何が必要かを探るために何人かの関係者にヒアリングを行った。石川は、社会資源である「あるモノ」に参加する者どうしに存在する様々な熟達度の違いをいかに解消するかという観点のもと、実践に取り組んだ。「あるモノ」への新たな付加価値の創発につながり、従来の教育や研修制度とは異なる熟達度の違いの解消法について、現場での実地調査と先行事例を踏まえた試験的なワークショップの導入を図った。片岡は、教育行政政策研究の観点から文部科学省の文教政策を鑑みつつ、特に余市町教育委員会の学校教育ならびに生涯学習政策動向に着目すると同時に、近年理論ならびに実践研究の蓄積が進んでいる「開かれた学校づくり」との関連性から、学校という場の新たな役割について再検討を行った。

## IV. 研究結果

### 1. 価値が創出される“場”

これまで十分に目を向けられなかった「あるモノ」を社会資源化していくには、「あるモノ」のどうしを結びつけ、「あるモノ」を有している者や「あるモノ」の存在を知った者として、「あるモノ」あるいは「あるモノ」の組み合わせが持ち得る潜在的な価値を創出し、その価値を「あるモノ」に十分に担わせる必要がある。さらに、その価値の存在や価値の持つ意義を「あるモノ」に気付いていない幅広い層に向かって周知し伝搬させることも必要となる。

「あるモノ」あるいは「あるモノ」の組み合わせが持ち得る潜在的な価値を創出し担わせる場、そしてその価値の存在や意義を伝搬させていく場には、次のような参加者が登場すると考えられる。

- ① 「あるモノ」の所有者。ただし潜在的な価値には気付いていない。人数は少ない。
- ② 「あるモノ」の存在を知った者。潜在的な価値に気付く。人数は少ない。
- ③ 「あるモノ」の存在を知らない者。多くを占める。

このうち最初の2者間では、「あるモノ」が持ち得る価値あるいは社会資源としての可能性について、どのような場であっても自由闊達な議論、アイデア出し、ブレインストーミングが可能である。一方で「あるモノ」を社会資源化し活用していくには、最初の2者が、③の「あるモノ」の存在を知らない者に対し「あるモノ」が持ち得る潜在的な価値を認識させ、「あるモノ」を大いに利用できるように何らかの“場”を提供すること、そして③の「あるモノ」の存在を知らない者はその“場”と、その“場”で扱われる「あるモノ」を楽しめることが求められるだろう。

このように相異なる3者それぞれが共有でき、「あるモノ」が持ち得る価値あるいは社

会資源としての可能性に楽しみながら気付ける“場”が求められることになる。

### 2. 「あるモノ」の発掘

#### (1) ヒアリングの方法と対象者

余市町の社会資源として既に地域に存在しているが、他の社会資源と有意に結びついてこなかった「あるモノ」を発見し再評価するために、コミュニティソーシャルワークの手法を活用し、地域アセスメントを行った。その際、ヒアリング先で収集した新たな社会資源の候補となる「あるモノ」を芋づる式にヒアリングを重ねていく手法を用いた。ヒアリングは、対象者の都合の良い時間帯に主に相手の勤務先にて行った。1回当たりのヒアリング時間は1時間から2時間であった。また、ヒアリングを経た後、繰り返し複数のヒアリング先の対象者に集まってもらい、フォーカス・グループインタビューを行った。

主なヒアリング先は、次の通りである。

- ・NPO 法人北海道エコビレッジ
- ・ドメーヌタカヒコ
- ・北星学園余市高等学校
- ・余市町総務部企画政策課
- ・後志環境管理株式会社
- ・余市商工会議所
- ・ホテル水明閣
- ・中根酒店
- ・中央水産試験場
- ・松浦組
- ・サンケン農場
- ・福原豆腐店
- ・寿湯
- ・余市ワインを楽しむ会
- ・小樽当事者研究会「たるとの会」
- ・リタファーム&ワイナリー
- ・地元チョークアーティストほか

以上のヒアリング先からの情報をストレングス視点で地域アセスメントをした結果、余市が持つ複数のストレングスが抽出された。

(2) 本研究におけるストレングスの捉え方  
 本研究ではストレングスとは、そのものももち顕在化および潜在化されている強さとして評価できるものとして捉える。ソーシャルワークの領域では、ストレングス視点による実証研究が1980年代にラップ (1998) らによって精神障がい者のためのケースマネジメントで注目された。白澤 (2006) らによって2000年代に高齢者のケアマネジメントの分野で意思表示の困難な支援者のニーズを把握するために活用されるようになった。その後、大橋 (2005) により、コミュニティソーシャルワークによる支援方法の基盤としてケアマネジメントの手法が取り込まれ、大橋の唱えるコミュニティソーシャルワークのなかに国際生活機能分類 (ICF) とともにストレングスの視点を取り込まれるようになった。

本研究で捉えようとした余市町に社会資源として既に「あるモノ」は、そのものもそもそも持っているが、それをストレングスとして評価されておらず、他の社会資源と有意に結びついてストレングスが高められてこなかったものである。

### (3) ヒアリング結果

結果、次のようなものをストレングスとして評価した。

#### 1) 北星学園余市高等学校

余市町に住居もしくは職場をもつ北星学園余市高等学校 (以下、「北星余市高校」) の教員で参加の得られた者を小グループにわけ、ブレインストーミングと KJ 法の手法を用いて、余市のもつ強さを抽出した。結果、「自然」「山」「海」「山の幸」「海の幸」「りんご」「果樹」「ぶどう」「ワイン用葡萄」「ワイン」「ニッカ」「マッサン」「温暖」「雪が少ない」「高速道路の朝里川から余市までの延長」「札幌に近い」「土地が安い」「買い物等では不自由がない」「いろんな人が入ってきている」「干渉されない」などがあつた。これら

を分類すると「自然環境」「自然の恵み」「地理的な利便性」「新参者の受入の良さ」が余市のもつストレングスとして大まかな評価ができることが分かった。

#### 2) 余市町

余市町の町政にかかわる部署へのヒアリングでは、余市は自然の幸に恵まれているが、これらは明治以降に入植した人たちが自然と闘いながら改良を重ねてきた結果で、元からあつたわけではない。これらが余市独自の人間気質を作り上げているといえる。一方で、近年は定年退職した世代が移住してきており、比較的教養の高い人が多く、地元の公開講座等への参加者が多いことが分かった。

#### 3) 余市商工会議所

余市商工会議所へのヒアリングでは、初代会頭がちょうど放送が始まる NHK ドラマ「マッサン」の竹鶴政孝氏であり、ドラマの影響で、国内外の観光客が押し寄せているが、ニッカ工場に集中しているだけで他への経済的波及効果が弱い。元々、余市は、会津藩の人が流れてきて形成された町で、戦前はニシン場の景気が良く、地元の寄附により小樽でなく余市に北海道の水産試験場を誘致しており、現在も道内の中央水産試験場となっている。果樹では、ミカンと柿以外は何でも採れる温暖な環境がある。昔は、米を作っていたが、りんご、生食ぶどう、梨、トマト、ワイン用葡萄と作付け作物が変遷してきている。これらの変遷は、農協等による主導ではなく、各農業者の判断で行われてきている。ある意味で世の中や自然をみながら柔軟に堅実に作付けを各自で替えていくという独立心抱負でフットワークの軽い土地柄といえる。一方で、一律に同じモノを作らないため、りんごでもたくさんの種類が育てられており、多様性や希少価値はあるが大きな市場に出荷するほどの収穫量がない。余市はヨソ者を温かく迎え

入れる懐の深さがある。そのため、余市には若者が就農で入ってきており、就農者が道内一である。特に近年はワイン用葡萄の栽培やワイン醸造での就農者が多い。しかし、農地は余ってきており、緩やかに人口が減ってきている。人口減少は他の地域より小さいが危機感がある。特に、高校生には地元に残ってほしいと考えている。余市の生産者は自分が作るモノに自信をもっており、トマトジュースなどブランド化し美味しいが、たくさんは生産されていない。

#### 4) 中央水産試験場

中央水産試験場（以下、「水産試験場」）へのヒアリングでは、現在の建物は平成のバブル期に建てられたのでお金をかけて作っている。昔の水産試験場の施設は東洋一と言われていた。水産試験場の主な仕事は、水産資源の漁獲予測を漁業シーズン前に行うことである。水産試験場では、自前の船で漁をして、水揚げした魚を解剖してそのシーズンの資源予測をしている。また、施設内の水槽で、各種の水産物の飼育をしており、そのため、沖合の海洋深層水をパイプで汲み上げており、絶えず水槽に供給している。海洋深層水は不純物（有機物）が少ないので、その水で捕ったものを洗うことで鮮度が長持ちし、海外等遠方の市場にも出荷できる。また、余市町内では現在、製塩は行われていないことがわかった。水産試験場は、これまでも漁協や企業など外部の小さな団体と共同研究をしてきており、共同研究の契約を交わすことで、海洋深層水の供給や施設を無料で使用することができる。

#### 5) リタファーム&ワイナリー

リタファーム&ワイナリーへのヒアリングでは、新規就農の夫婦が経営しておられ、ワイン用葡萄の収穫等では人手が必要なため、10年前から北海道社会福祉協議会のマッチング

事業を利用して、札幌や小樽の知的障がい者等の施設から障がい者を受け入れてワイン用葡萄栽培やワイン醸造の指導や作業を手伝ってもらっている。最高のロケーションで近くを車が通るのが見え、のんびりと開放感いっぱいの中で時間を過ごしてもらっている。リタファーム&ワイナリーのご夫妻は栃木県足利市にある有限会社ココ・ファーム・ワイナリー<sup>1)</sup>で研修を積んだ経験もあり、障がい者の就労移行支援事業に理解があるだけでなく、若者を中心とした生活困窮者の就労訓練事業にも関心を持たれている。また、ワイン用葡萄の栽培やワインの醸造は高校生でもできるという。人に使ってもらう予定で空けていた畑が一区画あり、北星余市高校の生徒の教育に使ってもらってもいいという。リタファームの畑は、余市町でも唯一南斜面に面しており、雪解けも早く、ワイン用葡萄の栽培には適している。現在、リタファーム内に納屋として使われてきた古民家があり、そこを改装して自前の加工品やワインおよび地元の特産物の販売、軽食やワインを飲む空間を作りたいと考えている。リタファーム&ワイナリーに関する情報発信はあまりしてこなかったが、ワインの評判を聞きつけて、東京からも自分で探してワインを買いに来る個人客がいる。しかし、現在はワインが飲める空間やトイレがないため、納屋を改装する。納屋の改装に当たっては、十分な資金がないため、屋根や壁は地元の大工に頼むが、内装は自分たちで行いたい。北星余市高校が近くにあるので、納屋の改装のアイデアや作業を手伝ってくれるなら歓迎したい。また、ショップ化された折には、商品開発や販売を手伝ってもらいたいと思っている。リタファーム&ワイナリーの将来構想では、畑の斜面にカーブをつくり、ワインの貯蔵と試飲ができるようにしたい。また、山頂の眺めがよく、海が見えるので、そこにレストランや宿泊施設を作ろうと構想している。その構想の背景には、余

市町内の宿泊施設は不足気味である一方、リタファーム&ワイナリーは、車がないと訪れることが難しい場所にあり、かといってワインの試飲や食事とワインを愉しむことが車の運転手にはできないことが課題となっているためである。今シーズンに収穫したワイン用葡萄で醸造したワインは、既にすべて売り先が決まっており、よいものを作れば売れる状況とのことであった。また、リタファーム内には、通常は破棄等されるが、今後の商品開発の材料となるものがたくさんあることがわかった。例えば、収穫後のぶどうの蔓はクリスマスの飾り付けに人気のリースの材料にもなるし、防風林として生えている松の松ぼっくりもたくさん落ちていて。さらには、春先には畑の至る所に食材となるヨモギが自生し、放置しておくとおちよとした木ようになってしまう厄介者という。

#### (4) 考 察

以上の様に複数のヒアリング先を訪れた。また、これらのヒアリング先の対象者に集まってもらい、フォーカスグループインタビューも行ったことがきっかけで、それまで横のつながりが全くなかった生産者同士が出会う機会ともなった。参加者からは、仕事場が近くても、取り扱う生産物が異なるとお互いの存在すら知らなかったということから、ヒアリングとは別に生産者同士で新たな創造に発展する可能性をもつネットワーク化を行うことにもつながった。

ヒアリングの結果、余市町がもつ重要なストレンクスが複数見つかった。また、課題も複数見つかった。余市町がもつストレンクスとして、「既に有名な土地」「自然の恵み」「温暖」「ヨソ者の受入」「小規模経営」「自主独立」「不干渉」「札幌に近い」などが挙げられる。一方、課題として「横のつながりが無い」「情報発信の弱さ」「若者減少」「担い手不足」が考えられた。

「既に有名な土地」では、改めて余市を宣伝しなくても知られているメリットがある。

「自然の恵み」「温暖」では、国内外の人から美味しいと人気のある北海道の海の幸だけでなく、果樹を中心とした糖度の高い美味しい山の幸があり、現在は栽培で長い実績のあるぶどうの延長としてワイン用葡萄の栽培に成功し、今後は益々質の評価が高まってくるだろう。札幌から小樽まで高速道路を使えば車で30分、小樽から余市まで車で30分、意外に「札幌に近い」。また、3年後の2018年には朝里川から余市まで高速道路が延長され、札幌-余市間が45分程度に短縮される。また、余市側の高速道路の出入口が、北星余市高校とワイン用葡萄畑が広がる登地区の間に予定されており、車を使った交通の便はさらに改善される。そのため、札幌からの客だけでなく、国内外の観光客の往来が増える交通条件があり、ニッカを始め、注目され始めたワインを目当てに訪問者が増える可能性がある。

現代につながる明治以降の余市の開拓の歴史として、互いに「不干渉」で「自主独立」に、家族で「小規模経営」をしてきており、それ故、結果的に「ヨソ者の受入」がよく、誰かへの断りもいらずに新規事業を始められる土地柄であることが分かった。フォーカスグループインタビューでは、ワイン、トマトがあるので、美味しいチーズがあればいいとも意見が出された。そこで、新規事業を始めやすい環境であるため、協力が得られる農家さえあれば、例えば水牛数頭を飼ってもらい、水牛のミルクでナチュラルチーズを作る工房を作ることも可能であるとなった。また、水産試験場で汲み上げている海洋深層水を使って製塩し、余市の食材を使った料理や加工品に使用することも可能である。また、リタファームで厄介者となっているヨモギを練り込んだパスタや廃棄されるぶどうの蔓や松ぼっくりを材料にリースづくりの講座の開催や商品化ができるだろう。

ヒアリングの結果、課題として考えられた「横のつながりがない」ことについては、ヒアリングやフォーカスグループインタビューがきっかけで生産者同士がつながれたことが喜ばれたこともあり、これまでは余市町内の生産者は積極的に交流するような機会やネットワークがないため、研究者がコーディネーターやファシリテーターとして橋渡し役を担うことでこれらのネットワーク化を図り、各生産者が自慢の生産物を持ち寄り、食材やワイン、ウキスキーに合う料理のレシピの開発や商品化をしていくなど生産者同士の交互作用を促しことは可能だろう。また、自分が作ったものにプライドをもつ生産者が多い一方で、「情報発信の弱さ」があったため、自分たちの生産物や新たな取り組みをインターネットやSNSを通じて情報を発信していく必要性があるが、単に日本語だけでなく、地元のボランティアの手を借りるなどして、英語や中国語等の言語でも発信が求められる。

「若者減少」や「担い手不足」の根源は、単に人口減少でなく、地元での雇用が増えていなかったこと、雇用があっても季節労働であったりして、年間を通じて生活していけるだけの十分な収入が見込めないことが背景にあるだろう。そこで、余市の生産物や土地、自然を魅力的に上手く情報発信することで訪問客を増やす一方で、バラバラだった生産物を上手く結びつけ地元のワインやウキスキーとも合う付加価値の高い新たな料理や商品を開発し、景色を楽しみながら滞在できる環境整備を通じて、地元に必要な収入を得られる就労環境をつくっていけるだろう。そうすれば、地元高校を卒業した「若者」のみならず、就労を希望する障がい者や生活困窮者、「ヨソ者」として道内や国内から活力ある人材が職住を余市町におく日も夢ではないだろう。そのためには、余市町にはコーディネーターやファシリテーターの存在が必要と思われる。

### 3. 余市町のワイン用葡萄とリタファーム&ワイナリー, 10R ワイナリー

#### (1) 余市町におけるワインの歴史<sup>2)</sup>

余市町が町内で本格的なワイン用葡萄の栽培を始めたのは、1984（昭和59）年サッポロワインが、町内の生産者とワイン用葡萄の栽培契約を締結したことによるが、その前年の1983（昭和58）年サッポロワイン及びはこだてわいんが、町内の生産者とワイン用葡萄の試験栽培を開始したことも影響している。余市町は、1875（明治8）年北海道開拓使から、りんご、ぶどう（生食用）、梨、スモモの苗木（800本）が配布され、その2年後には葡萄が結実するなど果樹栽培には適した地域であった。1920（大正9）年には、大浜中におぶどう（生食用）を植栽し、良質で良食味の栽培に成功している。1934（昭和9）年には、大日本果汁株式会社北海道原酒工場（現ニッカウキスキー余市蒸留所）が設立され、4年後にはアップルワインを発売している。また、1974（昭和49）年には、日本清酒株式会社の「余市ワイン」が設立されている。1984（昭和59）年サッポロワインが、町内の生産者とワイン用葡萄の栽培契約を締結してから、1985（昭和60）年には、余市ワイン、北海道ワイン、はこだてわいん、ニッカウキスキーが、1996（平成8）年には、グレイスワイン、2002（平成14）年には、池田町ブドウ酒研究所が、町内の生産者とワイン用葡萄の栽培契約を締結している。さらに2010（平成22）年、ドメヌ・タカヒコ（ワイン醸造所）がオープンし、2011（平成23）年、余市町が、「北のフルーツ王国よいちワイン特区」に認定されるなど、栽培と醸造を兼ねるワイン用葡萄生産者が誕生し始めた。2013（平成25）年、リタファーム&ワイナリー、株式会社 OcciGabi ワイナリーがオープン、2014（平成26）年には、登醸造がオープンするなど、現在37のワイン用葡萄生産者とワイナリーがある。



(2) 余市町のワイン用葡萄生産状況<sup>(3)</sup>

2011(平成23)年農林水産省「特産果樹生産動態等調査」,および平成26年度余市町経済部農林水産課産業連携推進係調べでは,ワイン用葡萄の栽培面積は,全国で1,033.1ha,北海道全体では,399.0ha(39%),余市町は107haと北海道全体の27%を占めている。ワイン用葡萄の収穫量は,全国で,4324.4t,北海道全体では,1251.3t(29%),余市町は588tと北海道全体の47%を占め,いずれも北海道内1位である。余市町で栽培されているワイン用葡萄品種と作付面積は,ケルナー(40.07ha),ツヴァイゲルト・レーベ(25.21ha),ミユラー・トゥルガウ(14.25ha),ピノ・ノワール(15.96ha),パッカス(7.27ha),レジェンド(4.73ha),シャルドネ(2.5ha),セイベル13053(2.32ha),レンベルガー(2.23ha),ドルンフェルダー(1.1ha),ソーヴィニヨンブラン(1.1ha),ピノグリ(0.9ha),ゲヴェルツ・トラミネール(0.5ha),カベルネソーヴィニヨン(0.4ha),ジャーマンカベルネ(0.3ha),セイベル9100(0.25ha),アルモノワール(0.2ha),メルロー(0.21ha),シルバーナ(0.05ha),ピノムニエ(0.2ha),セイベル5279(0.1ha),その他(0.54ha),合計120.39haである。

(3) リタファーム&ワイナリーについて<sup>(4)</sup>

## 1) ワイナリー設立の経緯と現状

## ①名前の由来

リタファームの名前であるが,この土地は,もとはNHKドラマ「マッサン」で有名になったニッカの創設者竹鶴政孝にゆかりのある嶋宮辰二郎氏(86歳)の畑であった。現在でもこの地区の南側にニッカの畑がある。この辺りは,竹鶴政孝やリタが風景を見に来てスコットランドの風景と似ていることから気に入った場所であり,リタの名前からあやかってリタファームと名前付けた。当初,リタの名前は宗教用語かと深読みされることもあった。

まだ,いまのようなリタの知名度は低かった時代である。

## ②設立動機と準備

1998年頃,余市では農薬を過剰にまく農家が散見され,無農薬野菜や健康な果樹とは何かを考えるようになり,2007年の長女出産を機に健康食品に関心をもった。余市では,竹鶴政孝が,規格外のリンゴ等,売り物にならない廃棄分をすべて買いとってジュース等の加工品にしたと聞いている。農産物の規格外品を廃棄してしまう状況を目の当たりにして,それはもったいないとジャムやトマトソースを作り,それらを福祉施設のパザーで売ったりした。また,北海道のトウキビを使ったコーンフレークの加工も検討したが,アメリカの会社の特許が壁になり諦めた。そこで,コーンフレークにかわる玄米等でシリアルをつくった。2007年秋「きたキッチン」で販売したことによりマスコミに取り上げられて火が付いた。当時は,ドライフルーツが入ったシリアルが少なく,値段が割と高価であったにもかかわらずセレブらの支持を得た。甘みを付けていないので珍しいと言われ,その収入が,ワイナリーの資金源となった。

## ③ワイン特区第1号

その後,余市町のワイン特区第1号を取得した。特区免許は,2klでワインを作ることが出来るが,その生産量では採算が合わない。町が取り組む新しい試みに協力はしたが,特区免許は即座に解除せざるを得なかった。また就農後に青年就農給付金制度を活用した。この制度には準備型と開始型があるが,先に農地を入手したので,開始型を使用した。2010年代は,ワイン用葡萄農家があっても原料生産者で,大手酒造メーカーの契約農家がほとんどであった。

## ④夫婦の経歴

農業をやる前,由利子氏はフランスのシャンパーニュ地方で醸造とぶどう栽培を学んだ。夫の誠人氏は醸造機械のメーカーに勤めてい

た。気候としては、シャンパーニュ地方は寒く、北海道はフランスのアルザス地方よりシャンパーニュ地方に近いと思っている。北海道も北国であることからワインに適度な酸が残り、本格的なスパークリングワインを作ることが可能であり、将来は、本格的な北海道産スパークリング作りを目指している。現在は、白ワイン醸造が中心で、ワイン用葡萄の品種としてはケルナー、ピノ・ノアール、ソーヴィニヨンブラン、メルロー、シャルドネなどを使って作っている。

#### ⑤風のヴィンヤードと王冠（クラウン）

ワイン用葡萄畑「風のヴィンヤード」は、栽培面積約3haの余市町登地区、最南部に位置する緩やかな南斜面の葡萄畑である。害虫と呼ばれる虫と共存することから学ぶべきこともあると考え、圃場内（ほじょうない）の生態系を極力崩さない畑造りに取り組んでいる。南風が余市湾へと吹き抜けるため「風のヴィンヤード」と名付けた。

ラベルは、王冠（クラウン）であるが、ここにはシャンパーニュのルミアージュ（【remuage】）ワインの製造工程のひとつ。逆さまにして傾けたびんを少しずつ回転させることによって澱を取り除く作業のこと。動瓶。）という意味が反映されている。トレードマークでもあるクラウンマークだが、シャンパーニュ製法で欠かせないルミアージュの工程の中で、なくてはならない王冠とクラウンをかけた。デザインは、誠人氏が考えている。2013年より自園のシャルドネ種を使用した本格的なスパークリングづくりを行っており、将来的に畑の斜面内にセラー（貯蔵窟）をつくり、貯蔵と試飲ができるようにしたいと思っている。

#### ⑥障がい者の就労支援

以前、栃木県足利市にある指定障害者支援施設「こころみ学園」のココ・ファーム・ワイナリーに酒税法上の記帳研修に行ったことがあった。そこで障がいをもった人たちとの

関わったことで、何か自分たちにも出来るのではないかと思い、10年くらい前から障がい者の就労支援の一環として北海道の事業に参加し、引きこもりや統合失調症の人を受け入れた。受け入れた人の中には、黙々と作業に取り組み、休憩時間も寡黙な人や畑からSLが見えたりすると喜んで興奮する人もいたが、障がいの有無に関係なく今後も継続して受け入れていこうと考えている。

#### 2) 今後の方向性

- ①畑の隅に倉庫になっていた古民家を改修し、内装を自分たちで綺麗にして、2階をレストラン、1階をショップ（オーガニックコットン、ワイン等）にすることができないか検討していく。
- ②畑からの眺めの良さを活用し、宿泊施設等を建設する。
- ③次年度、2015年4月以降、北星余市高校の生徒と一緒に古民家リフォームをしたり、販売を手伝ってもらおう。北星余市高校で構想する高校生がつくったモノを売るアンテナショップの可能性を探る。
- ④北星学園大学の学生とのコラボレーションを行う。

#### （年表）

1998	余市町登町2016番地
2009	余市リタファーム 開園
2010	余市町登町1824番地 3ha 自社圃場、斜面整地（リング畑）
2011	自社圃場内2ha 植栽
2012	果実酒製造免許申請 自社圃場内1ha 植栽
2013	ワイナリー建設計画届出
2014	6月、余市町内で3番目となるワイナリー完成（果実酒製造免許取得） 3月、自社畑 ワイン初荷

注 リタファーム&ワイナリー（「HISTORY ワイナリー開業まで」  
（<http://www.rita-farm.jp/winery/index.html>, 2015. 5. 8）

(4) 10R ワイナリーと北星余市高校の関わり  
1) 10R ワイナリー設立の経緯と現状<sup>6)</sup>

ブルース・ガットラヴ (Bruce Gutlove) は、1961年ニューヨークに生まれ、1986年にカリフォルニア大学デイヴィス校の醸造学科を卒業後、ナパバレーのワイナリーでワインづくりを学んだ。1989年栃木県足利市にある指定障害者支援施設「こころみ学園」のココ・ファーム・ワイナリーで、ワインづくりに携わる。2000年には、ワインやスパークリングワインが九州・沖縄サミットの晩餐会に使用され、2008年には、北海道洞爺湖サミットの総理夫人主催夕食会で使用されるなど日本の葡萄を使って数々の名ワインやスパークリングワインを作り上げ、日本のワインを牽引してきた。2009年ココ・ファーム・ワイナリーでの仕事も継続しながら、北海道空知管内岩見沢市栗沢に14haの畑を確保し独自のワインづくりを始める。

北海道でワイナリーをつくる動機は、①自分独自のワインづくり、②ココ・ファームの製造部のスタッフの力量向上と自立心、③職人としてのこだわりと質の追求、④北海道の可能性、地理的条件、人的つながりなどが影響した。14haの畑のうち農地が9ha、そのうち2.3haが葡萄畑である。1.8haにピノ・ノワール8,000本、0.5haにソーヴィニヨン・ブランを1,500本、その他の葡萄を800本植えた。さまざまな環境やエネルギーを共存させるバイオダイバーシティ (生物多様性) やバーマカルチャー (持続可能な有機農業) を目指している。

ワイナリー名の10R (トアール) は、ワイナリーの名前を「意味のない透明なもの」にしたかったからである。なぜなら、ほかの農家から依頼されて受託醸造する場合、ワイナリーの名前を「名なし」にしておけば、ワインの作り方をその人の自由に出来ると考えたからである。そこで「あるワイナリー」、無印的な考え方をした。パートナーの亮子氏が

それなら「とある」の方がいいと言い、雰囲気から「トアール」にした。本当に重要なのは農業でありワイナリー (醸造) そのものはそれほど重要ではないと考えている。

だから畑での作業も含めて、できるだけ人の手を介入させない古典的なワインづくりに挑戦している。土地がどんなものを生み出すかを優先させる事にした。ワインづくりは基本的には科学であるが、昔の人たちの視点 (観察) を大切にしている。

4年前に亡くなったこころみ学園の川田園長が、「消えてなくなるものに、渾身の力をそそげ」と言ったと聞いた。この考えが大切だと思っている。ワインは、どんな人がどういう気持ちで、どういうものを使って、どういう夢をもってつくったか、そういうことを知りたくなる飲み物である。

今回、北星余市高校の学生達8名が、葡萄畑の草刈りと収穫後の仕込み作業に参加してくれた。この小さな経験から私たちが目指すものを感じ取ってくれたとすれば何か意味があったのではないかと思う。

## 2) 今後の可能性

今回、北星余市高校の学生達8名が10R ワイナリーとその畑で作業を手伝ったが、このことをスクールソーシャルワークとの関係で考察すると以下のようなことがいえる。

- ①スクールソーシャルワークの目的が、学校という場を中心に「子どもと家族の自立支援」を行うことであり、発達と生活に関わる包括的な働きかけであるとするならば、さまざま自然環境やエネルギーを共存させるバイオダイバーシティ (生物多様性) やバーマカルチャー (持続可能な有機農業) を学ぶことの出来る場 (例えば、10R) と教育現場が今後どのように繋がって行けば良いのかを考えるきっかけを与えてくれた。
- ②総合学習や課外授業等で、自然のもつ感化力を見直し、積極的に活用していくことに

よって、北海道家庭学校の創設者、留岡幸助の実践でも明らかのように、今日の学校におけるソーシャルワーク実践に求められる不登校児支援・被虐待児ケア・発達障害児支援、精神疾患児童等への治療・教育的な役割を補完する働きが期待できる。

- ③ワイン用葡萄の成長過程や醸造過程における共同作業を通して、従来の人間関係とは違った年齢や性別、職種の人々と出会い、関係を作っている「言葉」や「語り」、それによって織りなされた「ストーリー」を見だし、その変化に気づいた生徒もいた。関係者との対話を通して、従来学生個人がもっていた現実世界に広がりを与え、多様な認識をもつための機会提供が可能となる。

#### 4. 「あるモノ」の社会資源化のための価値の創出と伝搬手法

##### (1) 価値が創出される“場”とその共有

IV. - 1. で述べたように、これまで目を向けられていない「あるモノ」を社会資源化するには、「あるモノ」のどうしを結びつける、「あるモノ」を有している者や「あるモノ」の存在を知った者とで、「あるモノ」あるいは「あるモノ」の組み合わせが持ち得る潜在的な価値を創出する、「あるモノ」が担う価値の存在や価値の持つ意義を「あるモノ」に気付いていない幅広い層に向かって周知し伝搬させる、といったことが必要となる。そのためには、①「あるモノ」の所有者、②「あるモノ」の存在を知った者、③「あるモノ」の存在を知らない者、の3者が「あるモノ」が持ち得る潜在的な価値を相互に認識し、その価値を楽しみながら気付ける“場”が求められる。

この“場”では、「あるモノ」についての知識や経験が豊富な①あるいは「あるモノ」が持ち得る価値についての知識が豊富な②が、「あるモノ」についての知識あるいは「ある

モノ」が持ち得る価値の知識が薄い③に対して「あるモノ」が持ち得る価値を伝え、認識させることになる。さらには、その価値を担った「あるモノ」がさらにどのように社会資源として活用できるか①②③が共に考える“場”ともなる。この“場”では、①②と③の間に知識／経験共に大きな隔たりがあるため、①②を熟達者、③を初学者と捉え、知識を伝達する場と捉える事が可能である。ただし多くの明文化された知識の伝達とは異なり「あるモノ」を社会資源化していく時には、「あるモノ」が持ち得る価値を発見しながら、その価値を認めることが必要になるため、「あるモノ」の価値がどのように存在し「あるモノ」がおかれた中でその価値がどのように機能するのか実践を踏まえた実践知（金井、楠見、2012）として伝達されていく必要がある。そのため、従来の知識の伝達の場とは異なる新たな学びの“場”が求められる。

##### (2) “学習の場”の創出

ではこの“場”を如何に用意すれば良いのか。初学者と共に実践を通して価値を「発見」し共有する“場”は、2者間で時間をかけて知識や価値が伝達されていく徒弟制や、大人数に向けて一方的に価値を伝える座学のような場とは異なる。実践を通して、「あるモノ」が持ち得る価値が立ち現れる瞬間にその“場”の参加者が毎回立ち会い、その価値を認識し、その価値がその“場”において機能する様を共有する。そうすることにより③の「あるモノ」の存在を知らない者は、「あるモノ」の持つ社会資源としての価値を認識し活用できるようになる。またこの“場”で熟達者は、「あるモノ」が持ち得る新たな価値を初学者と共に探るため、熟達者にとっては当然なことが初学者にとっては当然ではないことに気付きそれを受け入れ、初学者だけに見えている何かを常に受け取ることも求められる。別の見方からは、このような“場”は三宮

(2008) が言う“Learning by Teaching の場”である、とも考えられる。

このように、「あるモノ」が持ち得る新たな価値を発見出来る“場”を「熟達者も初学者も共に学び合う場」だと捉えた時、価値を発見した経験を持つ初学者は教える側の熟達者に成り得ると考えられる。すなわち、価値を発見したかつての初学者は、全くの初学者とともに「あるモノ」の持ち得る価値を発見し伝達する行為に参加する時、自身が手にした価値がどのように価値付けされるものなのか客観視し、その価値が置かれる価値構造全体を意識する。さらに、全くの初学者とともに新たな価値を発見していく実践を通して、この価値および価値が置かれる価値構造全体の客観視を一層進めることになる。

本研究では、このような“場”の構築を目指し、全くの初学者が熟達者から知識を伝達されて行く場を参与観察し、その場で知識や価値がどう伝わっているのか、どう初学者に受け止められているのか観察した。

### (3) 参与観察経過

観察は、北星余市高校の「総合講義」の授業においておこなわれた。「総合講義」の各講義では、高校教員ではなく各分野の知識・スキルに優れた民間の方が担当者となり、実践を通して当該分野の知識とスキルの伝達をおこなっている。この担当者は熟達者となるが、「教えること」の熟達者ではない。また初学者の技量、動機付けの程度も様々である。この講義での実践が良い形にたどり着くには、熟達者と初心者がともに学び合い、初学者それぞれの到達点を了解しながら、各分野の知識・スキルを深めていくことが求められる。そのような場で、熟達者と初学者がどのように関与していくのか、という点から参与観察を進めた。

今回の研究ではスケジュールの都合上参与観察に十分な時間が割けず、熟達者と初学者

が関わり合いの中で見せる変化がどのようなものか、その“場”において両者の関係の変化を生み出すために必要な要素は何か、という点を十分に洗い出すことはできなかった。極めて限定的ではあるが観測された観察事例からは、熟達者が初学者に対して如何に寛容さと受容力を発揮するか、がこの“場”での最初のポイントになると思われた。熟達者は初学者が抱く疑問を受け入れた上で、その疑問が当該分野の価値とどのような関係にあるのか実践の中で解決させながら、その価値の持つ魅力に気付かせていく、といった役割を担っていることが確認できた。一方で、初学者が新たな教え手となり熟達者となっていく過程や、熟達者と初学者が共同して新たな価値を導出する過程は、十分に確認できなかった。

今後、この観察結果に加え新たな観察事例並びに実践をおこなっていくことにより、熟達者に求められる初学者の疑問の受け入れとそれへの回答に必要な要素、実践の中での疑問の解決と魅力発見において必要となる要素、すなわち価値を共有していく過程において必要となる要素の洗い出し、および、教え手となりながら価値を学び、価値を発見し、価値を広げ、初学者を巻き込みながら新たな価値を導出する方法について、具体的な実践を通して検討を加える必要がある。

## 5. 教育からの視点で考える

最後に、教育という視点から本研究の意義について別の角度から考察してみたい。

学校という存在が物理的にも、そして時として精神的にも社会の中にある存在として、いわば人々を惹きつける磁場としてコミュニティ内の資源や社会関係資本を引き付けて取りまとめることに留まらず、自ら積極的に関与することでコミュニティのありようを変容させていく大きな要因となることは言うまでもない。「開かれた学校づくり」は小中高に

留まることがなく、大学においても社会や地域に対する貢献の重要性を鑑みて語られることが多くなっている。この傾向は今後も公立私立、または学校種を問わず、強まっていくであろう。

そのような中で、余市町の学校教育や社会教育など文教政策について視点を変えて考えたい。実はその歴史を紐解くと、余市町の教育実践は、実は豊かな歴史的蓄積という土台の上にあることに気づくのである。

高倉によれば、「余市の学校教育は、創始期において郷学所として、全道の教育先進地として発足し、明治の洋式校舎、大正の中等教育、昭和の特色ある各学校の教育実践等、今日なお教育余市のゆるがぬ実績をもち、余市の社会教育も昭和初期の余市精神道場の実践が全道社会教育の先駆としての役割を果たした側面をもち、ともにすぐれた教育遺産を残している」と述べている（高倉1982：11）。いわゆる社会教育は戦後の社会教育法の整備によって教育行政の要のひとつとして実践が積み上げられていくが、この記述は余市町には学校教育のみならず、社会教育の領域においても活発化する歴史的遺産が歩んできた道の中に存在していたことを示している。また、「文化の面では、余市の文化財が北海道の文化財の中でも特異な存在であり、その位置づけをして遺跡の多い余市を浮き彫りにし、生命や生活にかかわりの深い医療・学芸・宗教について、時代によってそれぞれ消長がみられる」と述べられている点にも注目をしたい（高倉1982：11）。すなわち、本プロジェクトの核とも言えるネットワーク構築を考える前提として、既にあるモノを探していくプロセスが大事となっているが、余市町の特徴として時代によって浮かんで消えていくものがあつたならば、それを文化資本として継承することが困難であったことは想像に難くない。ただ、これを別の角度から考えると、そのような町の遺産について歴史を通して再発

見する機会も与えられている、ということになる。その証左として、余市文教発達史（戦後編）でも、「戦後の教育史について概観すると…（中略）…余市教育は、道央教育圏の中で、戦後北海道教育史や、戦後後志教育史の典型的な地域として、地域的特性を発揮し、発展をとげてきた。この動向の中で、戦後の文教発達史を、学校教育と社会教育の両面から追求する立場をとった」（高倉1987：11）、という記述がある。

以上の戦前と戦後の文教政策から現在または未来の余市を考えると、実はこれまでの歴史の中に本研究が対象としている社会資源化のルーツがあつたと言えるのではないかといえる。

ここで教育行政と学校経営の観点からこの議論を補足してみたい。余市町における平成27年度教育行政執行方針は、『広報よいち No.768』によれば、1. 自ら学び未来を切り開く学習指導の充実、2. 思いやりと自らを律する心を大切にす生徒指導の充実、3. 生命を尊ぶ心を大切にす健康・安全教育と教育環境の整備充実、4. 地域貢献に向けた学習機会の提供、5. 青少年の健全な育成に向けた環境づくり、6. 芸術文化活動の振興と文化財の保存と活用、体力向上と健康増進のためのスポーツ活動の振興、となっている。この中で着目したい方針が「4」である。具体的には「生涯学習の実現には、町民が生涯にわたっていつでも、自由に学習機会を選択して学ぶことができ、修得した知識・技能が適切に評価され、その成果が地域貢献に活かされることが大切です」とあり、そして成人教育では、人間性・社会性を生かした主体的に生活できるような、自己実現に向けた学習機会の提供、高齢者教育では、生きがいのづくりに向けた学習活動の提供と地域に生かせる環境づくり、となっている。この方針から伺えることは、本プロジェクトが推し進めている取り組みが、余市町が志向するビジョンと

合致するということであろう。

また、余市町には道立高校（北海道余市紅志高等学校）と私立高校（北星余市高校）がある。北海道余市紅志高等学校（以下、余市紅志高校）の「学校教育目標」は、(1)学ぶ意欲を持ち、個性を磨く人を育てる、(2)心の触れ合いを大切にし、社会に貢献できる人を育てる、(3)自分の夢に向かい、努力できる人を育てる、(4)生命を尊重し、元気で明るく生きる人を育てる、であり、そして「目指す学校像」は、(1)生徒・保護者・地域・教職員がともに夢や希望をかなえる学校、(2)地域に根ざし、地域の特性を活かし、地域を担う人材を育成する学校、(3)明るく爽やかな学校生活の下、生徒の自己実現を支援し育てる学校、である。余市紅志高校は総合学科の高校だが、その独特の授業として「産業社会と人間」がある。一方の北星余市高校の「教育方針」は、(1)キリスト教の精神にもとづき、教育が行われます。それは、皆が力を合わせて愛し合い、助け合って生きていくことを共に考えていく、(2)明るく、健康な体を鍛え、自然や社会を正しく科学的に判断できる力を養うことを、教科指導を通して追求する、(3)生徒を集団の中で育て、個人や集団の自主性、自発性、自治能力を育て、高めていく、(4)教育活動を支える優れた教師集団づくりを大切にしています、(5)父母、教師、生徒が一体になった教育を進めていく、である。両校は公立高校と私立学校という違いがあるものの同じ余市町に根ざして教育活動を展開しており、余市紅志高校が先述した「産業社会と人間」という授業によって先駆的な取り組みをし、そして北星余市高校もまた本研究を通して明らかにされたように高校生が積極的に地域づくりに貢献をしている。今後の課題としては、両校の連携や余市町教育委員会にも働きかけることで町内の小学校や中学校とも協働の取り組みを促進するスキームを構築するということがあろう。既に本プロジェクトを豊かにするリソー

スが学校の中に備わっている、とも言えるのである。

文部科学省は現在、さらに地域に学校を開く試みとして「コミュニティ・スクール」について諸政策を進め、道内でも研究指定校ではその理論と実践について協議が進められている。また、初等中等教育のみならず、高等教育にあっても「アクティブ・ラーニング」にも注目が集まっている。文部科学省によれば、アクティブ・ラーニングを「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」と説明している。これらの諸政策の進展もあり、今後本プロジェクトが教育研究・実践の観点からも貴重な知見を提供する機会となると言えるだろう。

## V. おわりに

本稿は、それぞれ研究領域やそのアプローチ方法が異なる4人の研究者によって分担執筆された。石川は、「あるモノ」の所有者と存在を知った者を知識や経験が豊富な熟達者と位置づけ、「あるモノ」の存在を知らなかった者を知識や経験についての初学者とし、「あるモノ」が持ち得る新たな価値を発見出来る“場”を両者が共に学び合う場だとした。岡田と栗山は、「あるモノ」の所有者と存在を知った者と思われた地方都市の社会資源を対象にヒヤリングを重ねた。その結果、地方都市がもつ歴史的な経緯のなかで洗練され生き残ったストレングスをもった社会資源を再評価し、その地方都市に既に「あるモノ」と

して捉えた。また、手がける生産物が異なることで近隣にあっても互いに認知してこなかった「あるモノ」の所有者を研究者が結びつけることで、地方都市に「あるモノ」のネットワーク構築と複数の「あるモノ」の交互作用により新たな創造が生み出される可能性があることが分かった。片岡は、地方都市の教育行政における歴史的遺産を再認識し、地方都市における今日の教育行政の方針や地元高校の教育方針のなかで謳われる地域貢献に向けた取り組みに注目し、アクティブ・ラーニングの手法に着目した。

以上のことから、本研究の今後の課題としては、地域貢献に参画する「あるモノ」の初学者の裾野を広げると共に、アクティブ・ラーニングを活用した初学者と熟達者の交互作用や初学者をも巻き込んだ熟達者同士のネットワーク構築および初学者が地域貢献の担い手として熟達者に成長していくためのアクションが必要であり、アクションを行ううえでは「あるモノ」を活用したストーリーを生み出していくことが重要であると考えている。

なお本稿は、2014年度北星学園大学特定研究費の助成を受けて取り組まれた「地方都市に『あるモノ』の社会資源化とネットワーク構築の試み（2014, 研究代表者：岡田直人）」による研究成果の一部である。

#### [注]

- (1) 栃木県足利市にある有限会社ココ・ファーム・ワイナリーは、1984年から酒類製造免許を取得し、知的障がい者らによりワイン用葡萄の栽培とワイン醸造を始めている。母体は社会福祉法人こころみ学園である。  
COCOFARM&WINERY ([http://cocowine.com/about\\_us/about](http://cocowine.com/about_us/about), 2015. 10. 08)
- (2) 「余市町のワインの歴史」  
(<http://www.town.yoichi.hokkaido.jp/kurashi/nourin/wine/wine-history.html>, 2015. 5. 1)

- (3) 「『ワインパンフレット』余市町」  
(<http://www.town.yoichi.hokkaido.jp/kurashi/nourin/wine/wine-pamp.pdf> / 2015. 10. 3)
- (4) 「リタファーム&ワイナリー 菅原由利子氏、誠人氏 インタビュー内容」2015年2月25日（水）10時～12時40分。
- (5) リタファーム&ワイナリー「HISTORY ワイナリー開業まで」  
(<http://www.rita-farm.jp/winery/index.html>, 2015. 5. 8)
- (6) ブルース・ガットラヴ（2014）『ブルース、日本でワインをつくる』新潮社図書編集室、pp. 144-179.

#### [引用文献]

- 高倉新一郎監修（1982）「余市郷土史第3巻 余市文教発達史」余市教育研究所編
- 高倉新一郎監修（1987）「余市郷土史第4巻 余市文教発達史（戦後編）」余市教育研究所編  
広報よいち No. 768（平成27年4月）  
([http://www.town.yoichi.hokkaido.jp/yoichidata/kouhou1504/kouhou1504\\_new-all.pdf](http://www.town.yoichi.hokkaido.jp/yoichidata/kouhou1504/kouhou1504_new-all.pdf), 2015. 10. 31)
- 北星学園余市高等学校  
(<http://www.hokusei-y-h.ed.jp/>, 2015. 10. 31)
- 北海道余市紅志高等学校  
(<http://www.yoichikoshi.hokkaido-c.ed.jp/>, 2015. 10. 31)
- 文部科学省「用語集 アクティブ・ラーニング」  
([http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/___icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf), 2015. 10. 31)
- 文部科学省「コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）」  
([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/community](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community), 2015. 10. 26)

#### [参考文献]

- 藻谷浩介, NHK 広島取材班（2013）『里山資本主義 日本経済は「安心の原理」で動く』角川書店
- チャールズ・A・ラップ著, 江畑敬介監訳, 濱田龍之介, 辻井和男, 小山えり子, 平沼郁江



- 訳 (1998)『精神障害者のためのケースマネジメント』金剛出版
- 白澤政和 (2006)「ストレングスマodelの考え方」月刊ケアマネジメント, 2006年2月号
- 大橋謙策 (2005)「わが国におけるソーシャルワークの理論化を求めて」ソーシャルワーク研究, Vol.31 No. 1
- 田中英樹 (2015)「コミュニティソーシャルワークの考え方」社会福祉士養成講座編集委員会編『新・社会福祉士養成講座 9 地域福祉の理論と方法』中央法規出版
- COCOFARM& WINERY ([http://cocowine.com/about\\_us/about](http://cocowine.com/about_us/about), 2015.10.8)
- 金井壽宏, 楠見孝編著 (2012)『実践知』有斐閣
- 三宮真智子 (2008)「言語情報の誤解に対するメタ認知を促す授業: learning by teaching の活用」鳴門教育大学情報教育ジャーナル, Vol. 5